

腎臓リハ NEWS LETTER

<https://jsrr.smoozy.atlas.jp/ja/>

発行：一般社団法人 日本腎臓リハビリテーション学会 事務局
〒162-0833 東京都新宿区笹筒町43 新神楽坂ビル2階
有限会社ビジョンブリッジ内 E-mail: kanri@jsrr-office.jp



理事長就任にあたって

一般社団法人 日本腎臓リハビリテーション学会

理事長 柴垣 有吾

このたび、日本腎臓リハビリテーション学会の理事長に選任頂きました柴垣有吾(しばがき ゆうご)と申します。上月初代理事長、山縣前理事長の大きなリーダーシップの下、関係各位が築かれてきた本学会の大きな発展をさらに持続させるよう、大変に微力ではありますが精一杯尽力する所存です。

近年、腎臓リハビリテーションの重要性はますます高まっております。慢性腎臓病(CKD)患者の増加に伴い、単なる腎機能の管理にとどまらず、言葉通りの健康寿命を延伸させるために包括的なアプローチが求められています。リハビリテーションとは本来、患者が元の生活に復帰し、それぞれの役割が果たせるようにすることが目標です。よって、本学会は運動療法のみならず、栄養管理、心理社会的支援など多方面からの取り組みを推進し、患者の皆様が幸せで生きがいに満ちた生活を送れる Well-being を達成できるよう支援していくことが必要です。その目標を達成するために3つの大きな方針を掲げたいと思います。

①文字通り“多”職種が参加し、そしてコミットするアカデミアとしての学会の推進

現在、本学会の会員の多くを医師と理学療法士が占めています。しかし、上記のリハの目的を達成するためには、看護師(臨床工学技士)、管理栄養士、言語聴覚士/作業療法士、薬剤師、認定/臨床心理士、ソーシャルワーカーなど生活に関わる多方面からの支援を行う専門家集団がそれぞれの得意領域で活躍し、協力することが必要となります。看護師や管理栄養士の会員数を増やすことが当面の目標ですが、その他の職種も同様に大切かつ欠かすことの出来ないピースです。委員会や学会でのセッションで、

これら職種が活躍・参加したいと思える場を作っていきます。

②学術の更なる推進

アカデミアである以上、研究活動やエビデンス構築などの学術の推進は学会の存在意義でもあります。これまで関係各位が築いてこられた学術をさらに発展させることが重要です。特に、現在進行中であるコホート研究には学会の総力を注ぎ、ガイドラインが依拠するに資する日本発のエビデンス構築が目標となります。これには、運動療法の視点のみならず、栄養の観点(オーラルフレイル含む)、生活再建・社会/家庭復帰の観点などからの新たなクリニカル・クエスションおよびアウトカム(医学的アウトカムのみならず、患者報告アウトカムや社会的アウトカム)も検討することが大切です。最後に診療報酬加算の継続や新規獲得に資する医療経済的な研究も重要であり、推進します。

③他学会との連携

日本には日本腎臓学会、日本腎臓病協会、日本透析医学会、日本腹膜透析学会、日本臨床腎移植学会など、腎疾患患者のケアに関与する多くの学会があります。それぞれの学会の素晴らしい取り組みが断片化することなく、お互いの強みを重ね合わせることで患者に一番寄与するものになることは間違いありません。当学会はこれらの学会との協力・連携(学術的連携、患者団体・行政へのアプローチなど)を深めていきたいと考えています。

本学会の活動を通じて、患者の皆様、ご家族、そして医療従事者の皆様にとって有益な情報と支援を提供できるよう努めてまいりますので、引き続きご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

理事長退任の挨拶と 日本腎臓リハビリテーション学会将来ビジョンについて



一般社団法人 日本腎臓リハビリテーション学会

前理事長 山縣 邦弘

(筑波大学医学医療系腎臓内科学・大学院人間総合科学研究科

腎疾患重症化予防・スポーツ腎臓学 特任教授)

このたび、任期満了に伴い日本腎臓リハビリテーション学会の理事長を退任いたしました。ここまで関係各位より多大なるご支援とご協力を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。

自身の理事長在任中にはこれまでの診療報酬対策委員会の活動の成果により、透析中の腎臓リハビリテーション指導加算の追加が認められたことで、それに伴う腎臓リハビリテーション講習会の開催とともに飛躍的な会員数の増加を果たすことができました。このような活気に満ちた学会の中で、さらに日本腎臓リハビリテーション学会誌の定期的刊行、学会主導の臨床研究の立ち上げ、次期腎臓リハビリテーションガイドラインの改訂作業の開始などの新事業や、腎臓リハビリテーション指導士制度の充実とともに教育研修制度の拡充など従前からの活動も活性化出来ましたのも、皆様のご協力の賜です。

このような中で将来の更なる日本腎臓リハビリテーション学会の発展を期し、腎臓リハビリテーションのさらなる発展と社会実装を見据え、将来ビジョンを策定し、日本腎臓リハビリテーション学会誌4巻第1号(2025年)に掲載させていただきました。本ビジョンは昨年までの前執行部(山縣邦弘、柴垣有吾、伊藤 修、松永篤彦、斎藤知栄、三浦美佐)に上月前理事長のアドバイスをいただいて作成致しました。

わが国は一般人口の急速な高齢化と共に、腎領域においても疾患構成が大きく変貌し、その治療法、管理法も大きく変化してきております。このような中で腎臓リハビリテーションは全ての腎疾患患者の身体機能の改善のみでなく、腎疾患そのものあるい

はその治療にともなう合併症の発症予防、さらに保存期慢性腎不全に対する腎機能の低下抑制を重要な目的としており、いわゆる慢性腎臓病治療の主流となって、ますますの充実とともに、その普及啓発を図ることが、日本腎臓リハビリテーション学会の社会に対する重要な使命であると考えられます。「包括的腎臓リハビリテーション」の全国的普及を推進するための中長期ビジョンとして位置づけならびに学会の理念と実践の両輪を強化するべく、この5ヶ年計画を作成しました。本ビジョンでは、①エビデンスに基づく臨床研究の推進、②教育体制と人材育成の強化、③国際連携と情報発信の拡充、④組織運営と財務基盤の安定化など、自身の理事長在任期間ではなしえなかった課題を浮き彫りにし、解決の糸口なることを切に願っております。腎臓リハビリテーションの未来をともに築いてまいりましょう。一読いただけますと幸いです。

また昨年より、日本腎臓リハビリテーション学会の認知度をより向上させるために学会紹介スライドを学会ホームページに掲載させていただきました。スライドは、学会ホームページ内の会員専用ページよりダウンロード可能です。多くの皆様にご利用いただけますと幸いです。

今後は新理事長のもと、学会がさらに発展し、腎臓リハビリテーションの理念が広く医療現場に浸透していくことを心より願っております。

最後になりますが、会員の皆様のますますのご健勝とご活躍を祈念し、退任のご挨拶とさせていただきます。

腎リハコホート研究(REVEAL)のご紹介

一般社団法人 日本腎臓リハビリテーション学会

学術委員会 星野 純一

研究ワーキンググループ設立まで

2018年、当学会にて世界で初めての腎臓リハビリテーションガイドラインが発刊されました。その際、日本発のエビデンス構築が今後の重要課題であることを改めて認識し、国内における腎リハの実態調査および学会レジストリ構築を目的とした若手主体の「調査研究ワーキンググループ(WG)」を立ち上げる構想が生まれました。本WGは、①腎リハ全国実態調査(特に透析時運動指導等加算(以下運動加算)に関する現況)、②研究基盤となる腎リハレジストリの構築、③今後の保険収載(特に保存期CKD)を目指した新規項目の検討、④今後の学会活動を支える若手研究者の育成、の4つを目的として、山縣邦弘前理事長・成田一衛学術委員長のご指導のもと、原則40歳以下の若手であること、多職種構成であること、そして理事・評議員の推薦があることを条件にメンバーを募り、2022年12月から合計13名の若手メンバーとともに、実態調査班・透析期レジストリ構築班・新規調査項目班(特に保存期CKD)の3班体制で活動を開始しました。

診療報酬加算に関する実態調査

2022年に運動加算がはじまり、加算取得状況や透析時運動の安全性に関する実態調査が求められました。そこで祖父江理先生を中心に、2023年1月から3月にかけて、日本透析医学会の全参加施設(4,257施設)を対象に、“腎リハ加算”の実態調査を実施。想定を超える38.9%の施設より回答を頂きました。この場を借りてご協力いただいた施設の皆さまに御礼を申し上げます。その結果、回答施設の33%(全送付施設の13%)が“腎リハ”を実施している一方、理学療法士など運動指導専門職が36%しか在籍していない実態が明らかになりました。また有害事象調査では、重篤の可能性のある事例が18件あり、これらの2次調査を実施。その結果、投薬を要した不整脈1件、穿刺針の抜けかけを1件認めたものの、いずれも転帰は良好でした。加算開始から1年間で多くの施設が“腎リハ”を安全に施行している実態が明らかになり、こ

れらの結果は2024年 Scientific Reports (Sci Rep. 14(1): 9171, 2024)誌に報告しました。

レジストリ研究

(Registry of survey on renal rehabilitation: REVEAL 研究)

日本発のエビデンスを世界に発信するためには学会主導でレジストリを構築する必要性がありました。この理念のもと、木田圭亮先生を中心にレジストリ構築班が発足しました。透析患者に対する後ろ向きコホート、および一定の評価基準で評価するとともに、認知機能・生活機能を含めた腎リハ効果の検証を目的とした、運動指導を実施中・実施予定の透析患者に関する前向きコホートの2つのレジストリを計画し、2024年1月に本研究の正式名称としてREVEAL-D研究と命名。後ろ向き研究は2024年3月に東京女子医科大学研究倫理審査委員会の承認ののち、全国10施設の協力を得て実施。現在、年齢・性別・透析歴を近似した運動群・非運動群の合計約700例のデータ収集が完了し、解析計画が進んでいます。また、前向きコホート研究も研究参加施設を募集している段階です。

保存期CKD患者については、腎リハの重要性は認識されているものの、保険算定や人的資源の問題で十分に行われていない現状があります。現在、藤井直彦先生をリーダーとして実用的な評価指標の構築に向けた検討を行っています。

今後のエビデンス創出にむけて

学術委員会調査研究WGでは、上述のような実態調査および保存期CKD・透析期の研究活動を精力的に行っています。これらの活動により、腎臓リハビリテーションに関するエビデンスが、“REVEAL-J”として日本から発信されていくことを期待しています。本研究活動に興味と情熱ある方は、是非学術委員会までご連絡下さい。

第15回学術集会報告

第15回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会

会長 小林 修三

湘南鎌倉総合病院 院長

2025年3月15(土)-16日(日)の2日間、第15回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会をパシフィコ横浜会議センターにて開催致しました。本会はテーマを「楽しいから始める腎リハ〜ウェルビーイングな暮らしを求めて」としました。腎臓リハビリの課題の一つに、リハビリの継続率を上げることがあり、そのためにも、「楽しみながらリハビリを行うこと、生活のなかに取り込むこと」が重要であると考え、テーマを定めました。

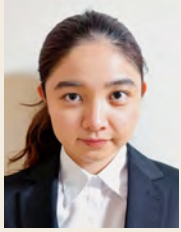
本会では、1802名と非常に多くの方々にご参加いただき、一般演題では口演・ポスター併せて234演題ご発表いただきました。プログラムにつきましては、「楽しいから始める」ことに着目し、特別企画を合計16題企画しました。特別招請講演・特別講演では、藤田浩之キャノンヘルスケア USA 会長、黒岩祐治・神奈川県知事をはじめ様々な分野から計8名のゲストスピーカーをお招きし、「Well-being な社会の実現」を考える絶好の機会となりました。

新たなアプローチの一つとして、リハビリにおける音楽の力に鑑みて、日本音楽療法学会と協力した特別講演・ジョイントシンポジウム等を企画し、好評を博しました。また、リハビリを行ううえでフットケアの重要性を考慮し、フットケアに関する企画も多く設けました。さらに、関節・血管エコーのハンズオンセミナー、再生医療・スポーツ医療等に関するセッションを新たに企画しました。他のプログラムにつきましては、大会長講演、理事長講演、シンポジウム、特別・ジョイント・会長企画・共催各シンポジウム、国際腎臓リハビリテーション学会、YIA セッション、教育講演、よくわかるシリーズ、ハンズオンセミナー等多岐にわたる内容を企画し、会員懇親会では約300名が参加し、鎌倉ワインとJAZZ演奏で盛況を呈しました。

最後に、学術集会主催の機会を頂きましたことに深く感謝するとともに、本学会の益々の御発展を心より祈念いたします。



第15回学術集会 Young Investigator Award 受賞者紹介



池田 理紗 嬉泉病院 リハビリテーション科

「血液透析患者の酸素摂取予備能を決定する酸素輸送能と骨格筋酸素利用能に関する検討」

この度は、第15回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会 YIA 最優秀賞にご選出頂きまして誠に光栄に存じます。ご指導いただきました嬉泉病院院長の上畑昭美先生、リハビリテーション科の臼井直人先生、小島将先生、共同演者の先生方、ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。本研究は、血液透析患者における酸素摂取予備能が酸素輸送能と骨格筋酸素利用能のいずれに決定されるかを検討し、運動耐容能は骨格筋酸素利用能に最も大きく影響されることが示されました。本研究の結果は、血液透析患者の運動耐容能向上を目的とした運動療法の治療選択に寄与する可能性があると考えております。この度の受賞を励みに、今後の腎臓リハビリテーション分野の普及と発展に貢献できるよう、より一層研究活動に精進して参ります。今後とも御指導のほど宜しくお願い致します。



田中 舞 新潟大学大学院医歯学総合研究科 腎研究センター 病態栄養学講座

「本邦のリアルワールドデータを用いたCKD患者の代謝性アシドーシスの評価および治療率の実態」

第15回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会 YIA 優秀賞にご選出いただき、身に余る光栄とともに、大変嬉しく感じております。本研究を進めるにあたり、川崎医科大学の長洲一先生、岸誠司先生をはじめ、新潟大学の先生方に多くのご指導を賜り、心より感謝申し上げます。我々はCKD患者包括的縦断データベース (J-CKD-DB) を用いて、わが国のCKD患者における代謝性アシドーシスの評価および治療実態を検討しました。その結果、血清重炭酸濃度の測定率は低く、診断や治療についても十分に行われていない可能性が示されました。代謝性アシドーシスはCKDの進行やサルコペニアへの影響が報告されているため薬物治療や食事療法による介入が望まれますが、まずは代謝性アシドーシスそのものの評価について現状の課題を明示できたと考えます。このたびの受賞を励みに、管理栄養士として、腎臓リハビリテーションの実践と発展に尽力してまいります。今後ともご指導の程何卒宜しくお願い申し上げます。



平野 裕真 浜松医科大学医学部附属病院 リハビリテーション部

「透析導入期の末期腎不全における老化抑制因子 α -Klotho と虚弱進行の関連性：前向きコホート研究」

この度は、第15回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会 YIA 優秀賞に御選出いただき、誠に光栄に存じます。ご指導頂きました浜松医科大学の加藤明彦先生、山内克哉先生、安田日出夫先生、藤倉知行先生、大橋温先生、国際医療福祉大学の河野健一先生、そして一緒に研究を築きあげて頂きましたリハビリテーション部の山口智也さんに深く感謝申し上げます。本研究は末期腎不全患者において、透析導入時の α -Klotho (老化抑制因子) が透析導入後の虚弱進行に関連することを明らかにしました。この結果は、透析導入期における虚弱進行予防策立案の基盤となり得ると考えております。本研究は審査員の先生方からのご指摘を参考に、更に発展させていく所存です。この度の受賞を励みに今後の臨床や研究活動、腎臓リハビリテーション分野の普及と発展に貢献できるよう、今後一層精進して参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い致します。



社会医療法人 天神会

社会医療法人天神会 リハビリテーション課
医療法人幸伸会 みやき統合医療クリニック通所リハビリテーション

大川 卓也

1. 法人紹介

社会医療法人天神会は、福岡県久留米市を拠点に、福岡県小郡市および佐賀県みやき町にも展開しており、グループ全体で3病院・6クリニック・看護学校・複数の介護施設を運営しています。急性期医療から生活期の介護まで幅広く対応し、「人々の豊かな生涯を支援する医療・介護の実現」を目指して日々取り組んでいます。

外来透析は1976年に開始し、現在は4つの医療機関で実施、透析患者数は約380名にのぼります。

2. 透析患者に対する運動療法



当法人では、2002年より動作能力が低下した透析患者を対象に、透析室のベッドサイドで運動療法を開始しました。2007年からはCPX(心肺運動負荷試験)に基づく個別の運動処方も導入しています。一時期は、透析前にリハビリ室やフィットネススペースを利用した運動も行っていましたが、現在は透析中の運動療法に一本化しています。

腎臓リハビリテーションは、医師・看護師・臨床工学技士・理学療法士など多職種による「腎リハチーム」が連携して実施。腎リハガイドラインに準拠し、

CPXが可能な施設では安全かつ効果的な負荷設定を行っています。透析中の運動療法は主に心疾患リハチームが担当し、回復期リハビリ病棟においても、整形外科手術後の透析患者に対して積極的にリハビリテーションを行っています。

3. 介護施設との連携

運動療法を必要とする透析患者の多くが介護保険サービスを利用しており、当法人の介護施設(入所・通所・訪問)を幅広く活用しています。通所リハには、腎リハ経験のあるスタッフをジョブローテーションで配置し、透析患者への安全かつ効果的な運動提供を目指しています。また、入退院時には院内イントラネットを活用して情報を共有し、切れ目のないリハビリの継続に努めています。

今後は、透析施設単体ではなく、介護施設との連携を強化することで、より質の高い腎臓リハビリテーションの提供が可能になると考えています。

2026年3月には、福岡県久留米市で第16回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会(会長:久留米大学深水教授)が開催されます。皆さまとお会いできることを楽しみにしております。



社会医療法人 天神会

〒830-8577

福岡県久留米市天神町120

URL: tenjinkai.or.jp

第16回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会のご案内

第16回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会

大会長 深水 圭 久留米大学医学部内科学講座 腎臓内科部門 主任教授
事務局長 柴田 了 久留米大学医学部内科学講座 腎臓内科部門 准教授

第16回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会を開催するにあたり、ご案内申し上げます。

近年、我が国においても透析患者の減少が報告されている一方で、患者の高齢化が進む中、保存期CKD患者や透析患者のADL低下による健康寿命の短縮や合併症の発症が課題となっています。その結果、必ずしもQOLが改善しているとは言い難い状況です。

このような背景のもと、日本腎臓リハビリテーション学会は2018年に「腎臓リハビリテーションガイドライン」を発表し、2022年には「運動加算」の算定が開始されるなど、学会と国が連携してこの問題に取り組んでいます。腎臓リハビリテーションの概念は徐々に浸透しつつありますが、依然として多くの課題が残っています。現在では、加算制度の導入により血液透析時のリハビリテーションが活発に行われていますが、その有効性や効果をより詳細に検証することが求められています。

また、保存期CKDに対する運動療法が腎機能の進行抑制に寄与するとの報告もあります。近年、CKD治療の選択肢としてSGLT2阻害薬、ミネラルコルチコイド受容体拮抗薬、GLP-1受容体拮抗薬の活用や、合併症である腎性貧血やCKD-MBDの管理が進歩しています。しかし、これらの薬剤を適正に使用しつつ最大限の効果を得るためには、患者自身の体重管理や筋力維持が重要であり、そのためのモチベーション向上が不可欠です。一部の薬剤においては体重減少によるサルコペニア発症の懸念もあり、腎臓リハビリテーションの役割がますます重要視されています。

そこで、本学会では「腎臓リハビリテーションの有効性を検証する学会」と位置付け、テーマを「一歩ずつ、明日への健康を築く～腎臓リハビリテーションの力～」といたしました。

血液透析におけるリハビリテーションの効果を検証するとともに、透析導入を回避すべく保存期CKD患者にも焦点を当て、“腎臓リハビリテーションの力”がどのように明日への健康を築くのかについて、医師のみならず、看護師、理学療法士、保健師、管理栄養士、薬剤師、行政関係者とともに深く議論を重ねる場にしたいと考えております。そして、さらなる高みを目指し、実践的な腎臓リハビリテーショ

ンを推進するための意義ある学会にしたいと願っています。本学会では、多職種連携の重要性を踏まえ、多くの学会とのジョイントシンポジウムを開催する予定です。

開催地である久留米市は、博多から新幹線でわずか17分、福岡空港から車で40分弱とアクセスしやすい立地にあります。また、B級グルメの名店が多く、質の高い地酒も豊富に揃っています。お越しの際は、これらの魅力もお楽しみいただければと思います。

ご参加いただく皆様にとって有意義な学会となるよう、鋭意準備を進めております。皆様とお会いできることを心より楽しみにしております。



会 期：2026年3月14日(土)・15日(日)
会 場：久留米シティプラザ
会 長：深水 圭(久留米大学医学部 内科学講座 腎臓内科部門 主任教授)
U R L：https://www.kwcs.jp/16jsrr/index.html
事務局：久留米大学医学部 内科学講座 腎臓内科部門
運営事務局：株式会社キョードープラス
〒700-0976 岡山市北区辰巳20-110

一般社団法人 日本腎臓リハビリテーション学会

●会員現況 (2025年4月30日現在)

正会員数 3,092名 (医師1,041名 医師以外2,051名)

施設会員 180施設 賛助会員1社

●役員

理事長	柴垣有吾						
副理事長	伊藤 修	深水 圭	松永篤彦				
理事	阿部雅紀	倉賀野隆裕	上月正博	齊藤正和	武居光雄	友 雅司	成田一衛
	平木幸治	星野純一	牧田 茂	水内恵子	宮崎真理子	山縣邦弘	和田 淳
監事	柏原直樹	小林修三					
幹事	石川祐一	伊藤大亮	小坂志保	斎藤知栄	櫻田 勉	祖父江理	飛田伊都子
	原田 卓	藤井直彦	細島康宏	松沢良太	三浦美佐		
名誉会員	秋澤忠男	和泉 徹	伊藤貞嘉	伊東春樹	草野英二	斉藤喬雄	中西 健
	平松義博	檜野博史	保嶋 実				
代議員	青池郁夫	浅野貞美	浅見豊子	安達 仁	安達裕一	阿部貴弥	荒川鉄雄
	荒木信一	有馬秀二	安藤康宏	猪飼哲夫	井垣 誠	池田大輔	石井孝典
	石川英二	磯良 崇	伊藤孝史	伊東秀崇	伊東 稔	今澤俊之	岩根美紀
	植田敦志	白井俊明	白井直人	宇田 晋	内田明子	内山清貴	宇野千晴
	海老原至	大川卓也	太田喜久夫	大竹剛靖	大西康博	大山恵子	緒方浩顕
	岡 英明	岡本威志	小川真澄	小川佳子	奥田康輔	奥田絵美	奥村利矢
	尾崎美紀子	小田弘明	音部雄平	小幡裕明	甲斐平康	風間順一郎	加藤明彦
	上條祐司	河辺信秀	河原崎宏雄	神田英一郎	神田武志	菊池正雄	木田圭亮
	北島幸枝	北林 紘	北村健一郎	木村 剛	木村朋由	忽那俊樹	熊坂隆一郎
	熊坂礼音	小岩文彦	河野健一	小崎恵生	小関裕二	後藤真希	古波蔵健太郎
	木庭新治	小林 愛	小山照幸	今田恒夫	齋藤久夫	齋藤 満	佐浦隆一
	佐伯博子	坂本杏子	櫻井吾郎	佐々木環	佐々木裕子	笹富佳江	佐藤恵美子
	重松 隆	柴田 了	島田美智子	庄司繁市	白井信行	鈴木祐介	鈴木裕太
	瀬戸由美	高田亜紀	高田知朗	高橋哲也	高橋直子	高山朋子	田倉智之
	武田尚子	田中哲洋	田中元子	田原 恒	田淵啓二	田淵牧子	玉浦有紀
	玉垣圭一	田村岳志	田村由馬	土谷 健	鶴屋和彦	遠山直志	戸田 晋
	富田泰史	長澤康行	中島 歩	長洲 一	長田太助	中村典雄	西岡心大
	西村彰紀	西山 成	野口雅弘	野村卓生	蓮池由起子	長谷川毅	島山真吾
	花房規男	濱知 明	濱田昌実	濱地亮輔	濱野慶朋	林 謙治	檜垣靖樹
	日高寿美	福岡長知	藤田 雄	藤谷順子	古井秀典	細井雅之	本田浩一
	前田清司	前田知子	牧野健一郎	正木崇生	升谷耕介	松藤勝太	松本竜季
	三浦伸一郎	三浦平寛	溝渕正英	満生浩司	村上礼一	室谷嘉一	森下義幸
	森 建文	森永裕士	森みさ子	森山善文	谷澤雅彦	安 隆則	安田宜成
	矢部広樹	若林秀隆	脇野 修	和田隆志	渡辺久美		